

● 拠点校の取組 ●

札幌学院大学バリアフリー委員会の取組 「ボトムアップからの歩み、学生と教職員の コラボレーション」

新國 三千代

(札幌学院大学 人文学部教授)

はじめに

本学は、学生数約四五〇〇名（五学部九学科、大学院三研究科）の文科系中規模総合大学である。障がい学生は二〇名程在籍する。二〇〇一年一月に発足したバリアフリー委員会は、障がい学生、支援学生、教職員の誰もが参加できる組織で、学生と教職員が協働して、現場における様々な課題と向き合いながら障がい学生支援に取り組んできた。

バリアフリー委員会の発足

一九九九年に聴覚障がい学生が入学した。対応が不十分で単位取得が困難な状況を知った大学院生が情報保障ボランティア団体を立ち上げ、テイカーを養成すると同時にノートテイクを開始した。二〇〇一年には聴覚障がい学生が二名となり、大学としての対応が検討されたが、毎日進行する教育現場に対応が間に合わず支援体制が整わない中で、学生と教職員が「バリアフリー委員会」を立ち上げる

特集・先進的な障害学生支援の取組～障害学生支援ネットワークより～

こととなる。窓口や教育現場で聴覚障がい学生と関わる教職員や支援に関心のある学生が自主的に参加した。

発足当初から、私は情報保障にパソコンを使うことを考えていた。手書きのノートテイクでは、授業中の教員の話や余談、学生の質問などの情報は要約される。パソコンは入力が速ければ、専門用語の辞書登録や学習機能を活用することにより、実況中継しているかのように文字化できる。保障の質という点では、ノートテイクより個人差が小さい。図表は手書きで補えばよい。という訳で、ゼミ生達とパソコンを用いたノートテイク（以下、パソコンテイク）を検討した。「情報がこんなにあふれていることに驚いた！ 講義の雰囲気伝わってくる」という聴覚障がい学生の言葉に手応えを感じ、二〇〇二年度からPowerを用いてパソコンテイクを開始する。ゼミ生達はパソコンテイクの手引き書を作成し、講習会で後輩を育てた。その後、聴覚障



学生主催のテイク講習会

がい学生もスキルアップを支援するようになる。

これ以降、委員会では、先輩が後輩を育てることが定着し、様々な取組において後輩が育つとともに先輩も育てられ、障がい学生や支援学生は勿論のこと、関わる教職員も学生達に学びながら育てられたように思う。本学の障がい学生支援は、このような「相互の育ち合い」という素晴らしい副産物を生み出しながら現在に至っている。

学内支援体制については、今年度、全学組織として「障がい学生支援連絡会議」が設置され、当初からの目標が九年を経てようやく実現した。

バリアフリー委員会の学生組織

ここ四、五年は支援を必要とする障がい学生が増え、テイク不足や配置の問題が幾何級数的な規模で増えた（テイク要望学生七（八名））。委員会の学生も一二〇名を超えた。これに伴い、様々な困難に直面するようになり、解決方法を模索する中で学生達は「部」を組織していく。二〇〇五年以降のテイク配置科目は年平均一二五科目（コマ数一七八〇）、一日一〇～二〇科目になる。テイクの養成も大仕事であるが、遅刻や欠席によるテイクの補

特集・先進的な障害学生支援の取組～障害学生支援ネットワークより～

充も頻発する。当初は教員や学生代表が補充を担っていたが、特定の人を介するとそこがネックになり滞る。配置の確認や補充等で一日に行き交う膨大なメール処理の対応を巡って試行錯誤が続く。このような中で、ティーカーの養成と配置を担当するティイク統括部ができた。ティーカー養成テキストを作成して講習会を開催し、ティーカー配置では確認ルールや補充ルールを作った。

ティーカー募集活動では、個人的な呼び掛けとともに年度始めの全学科のガイダンスで時間をもらい、手分けして協力を依頼する。そのためにポスターやチラシを制作する広報部を作り、学内の学生や教職員に取組を紹介する通信の発行や一年間の取組をまとめた文集制作、HPの更新を担当した。HPは取組の経過や成果をメンバー間で共有すると共に後輩に引き継ぐことを目的に委員会設立時に開設した。さらに、障がい学生とのコミュニケーションのために手話勉強会を開催したり、障がいに対する理解・啓発のための学習会を企画したりする学習部ができる。また、障がい学生や支援学生達が共に語り合える場を作りたいと、「みんなでしゃべり場」を企画する。その他、歓迎会や障がい者スポーツ大会など構成員間の交流や他大学・他機関との交流を企画する交流部、アルミ缶を集めて車椅子を贈る活

動をするCAR部、車椅子学生の登下校や学内移動介助として手が不自由な学生の筆記代行を担当する介助部が作られた。

このように学生達は必要とされる部を次々と考え出し、紆余曲折を経ながら、現在に至っている。現在は、代表と副代表の下に六部が置かれ(図)、その企画から実践までを主体的に担っている。学生達のニーズに柔軟に対応できる組織であったことが、学生主体の取組を可能にしてきた

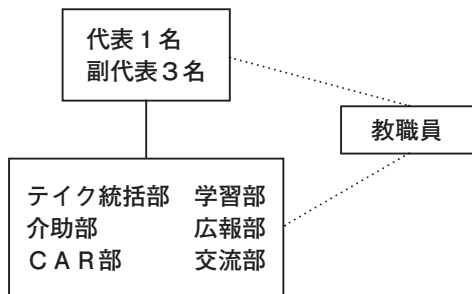


図 バリアフリー委員会 学生組織

と考えている。

バリアフリー委員会の取組がもたらした成果

二〇〇四年四月に学長から札幌学院大学における身体に障がいのある学生の受け入れについて諮問を受け、受入の現状と基本的理念および当面必要な対策等をまとめて答申した（委員会の教職員と学生の計一〇名で執筆）。学生は職員と共に車椅子で学内を移動し、改善箇所を洗い出し、車いすトイレの新規設置や改善、講義室の机やドアの改善、休憩スペースやスロープの設置等の要望をまとめた。学長は答申を受けて可能なところから順次要望を実現させ、私達は「学生と教職員のコラボレーション」の成果を実感することになる。

学生組織は毎年活動目標を定めるが、昨年からは「みんなで作る、みんなのための、バリアフリー委員会」を掲げている。「一人が欠けても周りで支え補い合う」、「一人だけで頑張るのではなく、会員同士がつながりを大切にして助け合う」という意味を込めているという。人的支援においては、感謝の気持ちや理解が相互の成長を促すことも多い。「ありがとう」という聴覚障がい学生の一言に、「もっ

とスキルアップしていいテイカーになろう」と毎日練習を続け、高度な技術を身に付けた学生がいる。「講習会に参加して、一生懸命練習をしている姿を見て、授業に向かう姿勢が変わった」という聴覚障がい学生がいる。

本学を卒業した聴覚障がい学生は全員就職や大学院進学を果たし、それぞれの道を歩んでいる。特別支援学校の教壇に立っているものもある。在学中は支援を活用しながら勉学に励み、支援学生達と共に人間的にも成長していった。彼らの姿は、障がい学生も支援学生もそれぞれ成長していく存在である。ことを気付かせてくれた。

おわりに

障がい学生支援は完結することはない。学びたいという意志を持つ学生に、その能力に応じて等しく教育を受ける機会を保障することは高等教育機関に課せられた使命であり、当然のことである。しかしながら、障がい学生が入学して初めてそのような環境が用意されていないことに気づく。日々進行する教育現場においては緊急性を要する支援が求められるため、学びながら支援を行うことも多い。私達は、これまでの取組から誰にとっても学びやすい環境は、

教職員だけではなく、学生と共に創るものであることを学んだ。できそうもないことを全部背負い込む必要はない。

他と連携したり、専門分野の研究者らの協力を仰げばよい。大学独自で解決できない問題については、日本学生支援機構や PEPPNet-Japan などから提供されている豊富な情報を参考にしたり、相談もできる。二〇〇七年に北海道障害学生修学支援懇話会を設立したが、地域のネットワークと繋がることで、個々の組織が相互に結びつき、障がい学生支援の取組全体が底上げされ、誰にとっても学びやすい「バリア無き学びの場」が実現されると考えている。

障がい学生支援と言っても実に様々である。本学においても多くの課題を抱えているが、支援にとつて最も重要なことは、実現するのが難しい大仰な支援体制を云々することよりも（大学としての体制作りは基本であるが）、現場で困っていることに耳を傾け、少しでも改善しようと努力することなのかもしれない。

本稿が、中小規模の大学で、しかも方針や体制が未整備な状態の中で、障がい学生支援に取り組もうとされている教職員の方々の参考になれば嬉しく思う。

（参考） 札幌学院大学バリアフリー委員会 <http://www.sgu.ac.jp/bfc/>